

子ども学

1998—2010

子ども学
保育
子育て支援
幼児教育
教育
赤ちゃん
比較行動発達
発達心理
障害児教育
虐待
生活習慣
おもちゃ
芸術
児童観
ロボット
メディア

子どもが命の尊さを学ぶとき

命の尊さ、大切さを子どもたちはどの程度理解しているのだろうか、いつ頃からそのようなことを身につけていくのだろうか。社会的にも重要なテーマになっている「人の命の大切さ」の問題に真っ向から踏み込んだシンポジウムとなった。

キーワード

- 生き物の命
- 人の命
- 子どもの残酷さ
- 生物学的な死
- 魂
- アニミズム的な生命観

プレゼンター 城田安幸 (SHIROTA Yasuyuki)

弘前大学農学生命科学部准教授。専門は進化生物学・行動生態学。NHKの幼児番組「むしむしQ」「あにまるQ」などの監修、構成も行う。昆虫や小さな生き物をこよなく愛する。

パネリスト 白川蓉子 (SHIRAKAWA Yoko)

甲南女子大学総合子ども学科教授。専門は幼児教育学。

司 会 一色伸夫 (ISSHIKI Nobuo)

甲南女子大学総合子ども学科教授。専門は子どもメディア学。甲南女子大学国際子ども学研究センター所長。

① Presentation 城田安幸

はじめに

「むしむしQ」や「あにまるQ」などの「なんでもQ」※1、みなさんが小学生の頃放送されていましたが、ご覧になっていただいた方はおられますか？そのころ、幼稚園や保育園の若い女性の先生たちの間に、「虫だと聞いただけで毛嫌いです」「昆虫の写真を見るのも嫌」という人々が増えているとのことでした。昆虫や生き物たちの「すばらしさ」や「たのしさ」を、伝えることができる番組が作れないものかという思いを持った人々が集まって、作った番組が「なんでもQ」です。クイズ形式で昆虫や生き物の面白さを、実写映像を交えて伝えました。幸い、番組は好評で、「あにまるQ」は日本賞の放送文化基金賞を受賞しました。

この番組の中では、昆虫たちや生き物たちの、「うんち」や「おしっこ」など、日頃、あまりお茶の間では見られないような映像も、積極的にお見せしました。たとえば、フンコロガシは脊椎動物の糞に卵を産み、幼虫はそれを餌として育ちます。普通の感覚では、少々「きたない」ものと避けるものを、積極的に「ふんころがしの歌」まで作って放送しました。「ふん ふん ふん ふん 汚い仕事と呼ばないで、おいらがやらなきゃ誰がやる～」という歌詞です。「愛のうんち」という歌は、「カバのお母さんがうんちする。子どもたちがそれを食べる。お～ お～、愛のうんち」というものです。

さらに、「かまきりの母ちゃんは、父ちゃんを食べる。だけどそうやって…。カマキリの幼虫がアリさんたちに食べられてしまうシーンや、タガメが小魚を捕まえ、体液を吸うシーンも出てきます。そのシーンの

タガメの台詞は、「ひどいやつだと思いでしょが、私たちが生きていくため、こうせざるを得ないのです」というものでした。つまり、できるだけありのままの昆虫や生き物たちの姿を、子どもたちに伝えようとしたのです。「きたない」「嫌らしい」と思っているのは人間で、虫たちや生き物たちから見たら、それらはもっとも「きたなく」なく、「嫌らしく」もないということをお伝えしたのです。他の生き物を、餌として必要な分だけ食べる生き物の姿には、人間の価値観に基づく、「善」も「悪」もないことを、お伝えしたのです。

反対に、「ゴキブリだ！ 不潔！ 殺せ！」と、殺虫剤をとどこかまわす噴霧する人間や、「アリだ！ 殺せ！」と熱湯を巣にかける人間の営みは、昆虫たちから見ればどのように評価されるのでしょうか。その行ないの中に、「小さな命を大切にできない」人間の「問題」を、掘り下げて考えて見ませんかというのが、僕が、今日の講演でお伝えしたいことです。さて、子どもは、どのような経験を通じて「命の尊さ」を学ぶのか、一緒に考えて見たいと思います。

※1「むしむしQ」や「あにまるQ」などの「なんでもQ」：「なんでもQ」は、NHK教育テレビの生き物の特徴をクイズと歌で紹介する番組（1995-2004）。シリーズサブタイトルとして「むしむしQ」や「あにまるQ」がある。

大漁
(金子みすゞ)

朝やけ小やけだ
大漁だ
大ばいわしの
大漁だ。
はまは祭りの
ようだけど
海の中では
何万の
いわしのとむらい
するだろう。

この詩は、27歳で自ら命を絶った詩人、金子みすゞさんのものです。彼女のような繊細な心を持った人は、人間の営みを、「大量虐殺」される「いわし」の立場から、直感的に捉えることができたようです。詩人の感性はするどく、「人間から見ればいわしがたくさん取れて大漁だけれども、いわしから見れば何万匹もの死を悲しんでいるだろう」という、立場の違いを直感的に見抜いてしまいました。

今日のお昼に魚や肉を食べた人はおられますか？僕たち人間は、自らの命を継続するため、他の動物や植物の命を絶ち、食物にしています。この行いに「罪の意識」を感じる人は、あまりいませんね。もっとも、ベジタリアンとして、動物の命はできるだけ食料にしない人々もいます。ベジタリアンの場合もお米や、パンなどの小麦を食べています。これらは、その植物にとっての次の世代を作る種（たね）です。りんごを食べる場合のように、果肉の部分を食べ、種を残すことも可能ですが…。いずれにしても、僕たち人間は、他の生命を食べることで、自らの命を維持していかなければならないようです。このことと、「命の尊さ」を学ぶことは、矛盾するのでしょうか？この点も、掘り下げて考えてみたいと思います。

それと、生物学的には人間は必ず「死」を迎えます。ところが、文学作家の作品や、画家の絵画が後世まで残ることで、まるで、その作家や画家がいつまでも僕たちの中で生き続けているかのように見る、「永遠の命」とも呼べる、「命」の捉え方があります。自然科学的な、「生命」や「死」と、文学的、芸術的、宗教的な「生命」や「死」の概念は矛盾するのでしょうか？それとも矛盾しないのでしょうか？子どもたちが捉える「死」の概念とはいったいどのようなもので、どのような経緯を経て学ばれるのでしょうか？これらの問題も考えてみたいと思います。

生物、自然に囲まれていた子ども時代

僕の父親は沖縄の生まれで母親は長野の生まれです。僕は大阪で、昭和23年(1948年)、いわゆる団塊世代のど真ん中に生まれました。僕たちが育った頃を描いた映画が、最近上映された『三丁目の夕日』と、その続編です。この映画に出てくる主人公の少年たちこそが、まさしく僕と同じ時代を生きた子どもたちです。その頃の日本は、未舗装の道路がたくさんあって、水洗便所もなく、台風が来て大水が出ると、それはもうたいへんでした。尾籠(びろう)な話になり恐縮ですが、汲取式の便所から人糞が、「ぶかぶか」浮かび出してくるのです。道もどろんこ状態で、その中を素足で歩いて学校まで行き来するのです。

僕の家の前も学校への通学路も、もちろん未舗装でした。晴れた日は、道のいたるところにクロヤマアリやトビロシワアリなど、何種類ものアリたちがいて、ミミズや小型のカナヘビなどを餌として、巣穴に運んでいました。町のいたるところに、地面がむき出しの「空き地」があり、そこで、一日中、アリを見ていることが好きでした。もちろん、学校の校庭にも、たくさんの昆虫たちがいました。

昭和の30年代(1956、7年)から、僕の住んでいた大阪の町中でも、道路の舗装が始まりました。工業化も始まりました。学校の先生も多くの大人たちも、「工業化で日本も栄え、僕たちの生活も便利になる」と、口を揃えて言いました。道路を舗装することで、自動車も走りやすくなりました。でも、僕には、「舗装されるアスファルトやコンクリートの下に住んでいる、アリやトビムシたちがどうなるのか、とても心配でした。「いわしが大漁だ」と喜ぶ人々と反対に、「海の中では何万のいわしのとむらいするだろう」と考えていた、金子みすゞさんと同じ見方をしていたのです。そういう意味でも、「かなり変わった子ども」だったような気がします。その原点とも呼べるものは、それまでの昆虫たちもふくめた、小さな動植物や、鎮守の森などにある大きな樹木とのふれあひから生まれた、生き物に対する「感性」だと思います。

僕が5歳まで過ごした町は、現在の大阪府東大阪市高井田です。ノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈博士が幼少期を過ごされたところで、江崎博士が日本経済新聞の「私の履歴書」に記述されていたように、高井田村の景色には「畑と田んぼしかなかった」のです。小学校に入る前に高井田村から、東大阪市布施に転居しました。父親の大八車に乗せられて引っ越しをする道すがらの景色も、一面の畑と田んぼと菜の花とタンポポでした。季節はおそらく春だったのでしょう。ミツバチが忙しく動き回っていた記憶が鮮明に残っています。昭和20年代の終わりの頃でした。

今では、想像さえできないことですが、近鉄の奈良線と大阪線の分岐点にある布施の駅前でも、オニヤンマが群飛していました(図1)。子どもたちは糸の両端に石やナットを結びつけ、「ラッポエー」と叫びながら空中高くほり上げます。それを「餌」の小昆虫と見間違えたオニヤンマが、「エサだ!」と襲いかかり、糸にからんで落ちて来る。ラッポとりの「名人」は捕まえたオニヤンマを指の間に5、6匹もはさんでいました。子どもたちの服はつぎはぎだらけのポロポロで、青く太い鼻水を拭くため、袖口が鼻水ででかっています。駅前さえ、まだ、未舗装で雨が降ると泥水が溢れ出していました。古材にトタン板を張り付けただけの、いわゆるバラック小屋が軒を連ねていました。

実家の隣りの400坪ほどの空き地を借り、父と母がそこを耕し、畑作業をしていました。ジャガイモやサツマイモ、エンドウ豆やササゲ。キュウリにスイカにトマト。すべての野菜を、農薬を使わず栽培していました。ジャガイモには必ずオオニジュウヤホシテントウの幼虫がつき、葉っぱをほとんど食べてしまう。それでも、沖縄生まれの父親は、「虫はご先祖様だ」からと、殺すことを許してくれませんでした。特に、



図1 昭和33年頃の城田と母
(後ろは近鉄奈良線の電線)

お盆の頃は、「僕につながる祖先たちが、虫に姿を変えて会いに来ているのだ」と教えられました。

近所のどこの家の中にも、必ず、大きなアシダカグモがいました。「虫」が嫌いなおばさんは、金網でできた「ハエタタキ」で、アシダカグモを叩きつぶすのです。腹部からでてきたクモの内臓を見た時、僕は、そのおばさんを「許せない」と思う、変わった子どもになっていました。今でも、生きた昆虫を採集して標本にすることに、罪悪感を覚えます。子どもの頃の僕の標本箱に入っていたものは、すでに死んだ虫を集めたものばかりでした。つまり、あまり美しい標本たちではなかったのです。

研究の第一歩

確か、小学校2、3年生の頃だと思いますが、カイコの胸にある三日月の模様を、「2つ一緒に見たら目に見える」と先生に話したことを覚えています。僕には目玉模様に見えたものも、先生は、「みんなが三日月模様って呼ぶから、三日月模様って覚えましょう」と話されました。実は、大学の教員の職を得てから、30年間、ずっと続けている選択実験があります。それは、目玉模様に見える幼虫を次々選択し、より、目玉模様に見える模様を持ったカイコを「進化」させる実験です。その結果得られたものが、ここに示す目玉クワイコたちです（図2）。

数年前、僕が卒業した中学校の50周年記念の、記念講演をしました。その時に、小学校時代のその先生も来られていたのですが、先生は「そんなことあった？覚えていない」とのことでした。先生にこの目玉クワイコの写真を見せると、「これは目に見えるね！」とおっしゃっていただきました。僕はとてもうれしかったのです！子どもの時の「疑問」をやっと先生に「認めて」いただいたという喜びでした。

僕の研究のテーマは、「進化を実験的に確かめる」方法を考えることです。今から約1億年前に生息していたと思われる化石昆虫にも、目玉模様があります。昆虫をはじめとして、魚や鳥や哺乳類まで、自然界にはこのような目玉模様を持った生き物たちがたくさんいます。もし神様がお創りになられたのではないとしたら、このような目玉模様はどのようにして進化して来たのか、それを明らかにすることが、僕のライフワークです。

自分の研究を方向付けるために、31歳の時に、『君は進化を見るか—虫たちの語るもの』という、児童向けの本を出版しました。幸いなことにサンケイ児童出版文化賞を受賞し、多くのおみなさんに読んでいただくことができました。この本のあとがきで、「わたしを『どうして病』に感染させ、現在まで研究を続けさせてきた原動力は、子どもの頃の自然とのふれあいの中から生まれた、知的探究心や好奇心だと思います」と述べました。その自然が、どんどんなくなっていくのが、昭和の30年以降なのです。僕は知らず知らずのうちに「命の尊さ」を学んでいたようです。それは、周りに自然がたくさんあり、命に満ちあふれていたからだだと思います。

さまざまな「生」と「死」から考える

次に、子どもの時から話を少し進めて、20歳の頃のお話をいたします。実は来年の1月で61歳になります。僕が大学に入学した頃は、ベトナムの戦争がとても激しくなった時期です。1968年3月16日にはソンミ村虐殺事件が起きます。当初は、村民に対する虐殺ではなく「南ベトナム民族解放戦線のゲリラ部隊との戦



図2 目玉カイコとクワコを交配して創った目玉クワイコ

い」という報告が行なわれましたが、翌年12月にアメリカの雑誌「ニューヨーカー」のセイモア・ハーシュ記者が「アメリカ陸軍が無抵抗の村民504人を虐殺」とこの事件を報じ、アメリカ軍の歴史に残る大虐殺事件が明らかになったのです。戦後の「民主主義教育」を受けてきた僕にとっては、アメリカは常に正しく、自由で豊かな国で、あこがれの的でした。その、あこがれの国アメリカが、虐殺事件を起こしたという報道に接しても、僕にはにわかには信じるできませんでした。その後、日本をはじめ、アメリカやヨーロッパなど、世界中で学生運動が盛んになるのですが、僕は政治的なものに関心を示すよりは、山岳部に入部し、自然を楽しんでいました。

実は、甲南女子大学のある兵庫県のこのあたりは、僕にとって極めて思い出深いところです。すぐその六甲山にロックガーデンがあるのですが、毎週土曜日にそこでロッククライミングの練習をしていました。その時、一緒に山岳部に入部したのは2人、その後1名が加わり、同学年の部員は3名だけなのですが、4年生の時の冬山合宿で、僕と一緒に入部した伊藤君が亡くなりました。僕はある事情で、その冬合宿には参加していませんでしたので、余計に伊藤君の「死」に対して、責任を感じるようになっていました。「もし、僕が伊藤君のそばにいたら…」という思いは、今でもあります。

最初の春合宿の時に、疲れて動けなくなった伊藤君の荷物を担ぎ、山の稜線で昇ってくる朝日をみんなで見た感激は、今でも思い出せます。その時の山岳部の部長先生が、名著『栽培植物と農耕の起源』で著名な中尾佐助先生です。中尾先生は自然科学者の枠に留まらず、民族植物学や民俗学にも造詣の深い方でした。伊藤君が亡くなった直後の中尾先生の授業で、先生が話されたことが、「生物学的な死と、宗教的、文学的な死」でした。「すべての生物は死を迎えるが、宗教的な意味や文学的な意味では、いつまでも生き続ける生がある」という趣旨のお話だったと思います。当時、悲しみに打ちひしがれ、自分を責め続けていた僕は、中尾先生のお話を受け入れることができませんでした。「生物学的に生きていなければ、すべての可能性がなくなる」と思っていたのです。

死なない生物

今お見せしているポスターの女性は、シャロン・プリンさんです。日本のテレビ番組などでも紹介されていましたが、シャロンさんは21歳の時に、脳に大きな腫瘍があることがわかりました。腫瘍を手術で摘出して、後3年間、ケモセラピー、抗がん剤治療をしました。けれども今度は、卵巣にがんが転移し、卵巣の摘出手術もしました。今も抗がん剤治療をしながら、一生懸命がんと「闘って」おられます。この写真のように、抗がん剤の副作用で毛が全部抜けてしまいました。なぜなら、抗がん剤はがん細胞のように、どんどん分裂を続ける細胞を攻撃するからです。実は毛根や免疫細胞も、分裂を続けています。そこで、抗がん剤治療を続けると毛が抜けたり、免疫細胞がダメになり感染症にかかりやすくなるのです。シャロン・プリンさんは、「頭に毛が無くても、がんと闘い続けている患者さんたちは美しい！」と言っています。僕も同感です。ところで、なぜがん細胞はいつまでも増え続けるのでしょうか？

実は、僕たちの体を構成する正常な細胞は、一定の回数、分裂を行なったのちは、「遺伝的に組み込まれた自殺（アポトーシス）」を行ないます。アポトーシスとは、僕たちや昆虫たちのような多細胞生物の体を構成する細胞の死に方の一種で、個体をより良い状態に保つために積極的に引き起こされる、管理・調節された細胞の自殺、すなわち「プログラムされた細胞の死」と定義されます。一方、血行不良、外傷などによる細胞内外の環境の悪化によって起こる細胞死は、ネクローシス、または壊死と呼び、アポトーシスと区別します。がん細胞は、アポトーシスを起こさなくなったため、いつまでも増え続けていくのです。つまり、「死なない細胞」、「死なない生命」はがん細胞で、僕たちのすぐ身近にいたのです。

がん細胞とは異なりますが、エイズウイルスもなかなか死にません。もっとも、「ウイルスは生物ではない」と考える方もたくさんいますが、僕は「生物のひとつのあり方」と考えています。限りなく無生物に近い生

物もいれば、限りなく生物に近い無生物もあるのです。ウイルスは前者だと、僕は考えています。エイズウイルスが発見された時、科学者は、「2年以内にエイズを克服するワクチンを作る」と公言しました。でも、誰にもこれはできませんでした。エイズに対するワクチンではできてはいないのです。なぜなら、非常に変異しやすいウイルスだからです。ウイルスの表面抗原がそれぞれ違うといえるほど、多種多様な型があります。そのため、ワクチンを作成することが極めて困難なのです。ある特定の抗原に対して抗体を作ることができてワクチンができたとしても、すぐに変異ウイルスが「進化」してくるため、効果がなくなるのです。

「性」の進化

少し難しいお話になりますが、今から約10～20億年前、海の中で僕たちと同じような真核生物が進化する時、先程お話しした「管理・調節された細胞の自殺」、すなわちアポトーシスが進化したようです。それと時を同じくして、「性」、セックスが進化するのです。真核生物は、「なぜ、たくさんのコストを払ってまで性を進化させたのか」については、いくつかの議論があります。亡くなられたイギリスの理論生物学者、ウィリアム・ハミルトン博士とオックスフォード大学で話し合い、「対談 21世紀 人類の進化シリーズ」というテレビ番組を作りました。ハミルトン先生が京都賞を受賞された次の年です。その時、ハミルトン先生は、「原核生物やウイルスなどの病気に打ち勝つために、真核生物は性を進化させた」とのお考えをお持ちでした。つまり、どんどん突然変異を起こして「進化」する病気に対して、性により遺伝子を組み替える方法で、僕たちの祖先は対抗してきたと、考えられていたのです。

また、ハミルトン先生は、「一定の役割を果たし、遺伝子を次の世代に伝えた個体は、速やかに集団中から、積極的に消え去る、つまり死ぬべきだ」とも述べられたのです。さらに、「細胞の死がアポトーシスのようにプログラムされているのだから、個体の老化や死も、あらかじめプログラムされたもので、肯定的に受け入れるべきだ」とも述べられました。もし、先生のお考えが正しいとしますと、「死」は決して「悲しい」ものや「否定的」なものではなく、生物学的には、「肯定的」で積極的に受け入れるべきものになります。でも、その「死」は、個体としての一定の役割を果たした後の、老化に続く「死」であるべきだと、僕は考えます。

死んだ人は生き返るか？

とても悲しいことがありました。長崎で、女子小学生が友だちの首をカッターナイフで切り、殺してしまった事件です。友人を殺害した女子小学生は、今でも、「自分が殺した相手に対して謝りたい」と言っているそうです。すでに、自分が殺して死亡した友人に、どうやって謝ろうと考えているのでしょうか。2004年の9月4日、5日に放映された番組、NHKスペシャル「子どもが見えない」で、長崎県長崎市立茂木小学校6年生担任の西田利紀教諭が、「死んだ人は生き返ると思いますか」という質問調査を行ないました。この問いかけに対し、6年生のあるクラス33人中28人が「死んでも生き返る」と思うと回答したということです。みなさんはどうでしょうか？死んでも生き返ると思われる方は、挙手していただけますか？誰も手を挙げられないということは、みなさんは「死んだ人は生き返らない」と考えられるわけですね。この会場のみなさんと、長崎の小学6年生との違いを、どのように理解すればよいのでしょうか？「子ども」と「大人」の違いだと、割り切れればよいのでしょうか？それとも、今を生きる子どもたちの間に、何か変化が生じているのでしょうか？

多くの子どもたちが、「死んだ人は生き返る」と答えた背景に、コンピュータゲームの影響を指摘される研究者もあります。たとえば、ゲームの場合は、「ゲームオーバー」で、またいつでも、一からやり直すことができるのです。さらに、ややこしくなってきたり、自分の気に入らなくなったら、「リセット」をかけることが可能です。このようなバーチャルな世界や「死」と、現実のものが混同されているのではないかと

いう指摘です。ところで、『死の人間学』の中で、内田伸子先生が、興味深いことを述べられています。前述の西田教諭が小学生にしたのと同じ質問を大学生に問いかけたところ、回答を寄せた32名全員が、「人は一度死んだら生き返らない」と答えたとのことでした。ただし、その中に、次の回答を寄せた大学生もありました。

【回答】

幼児期の頃の自分：「人は一度死んだら生き返らない」と答えます。

学童期の頃の自分：「人は一度死んだら生き返らない」と答えます。

青年期の頃の自分：「人は一度死んだら生き返らない」と答えます。

成人の自分：答えは二通りあります。

1. 人間の肉体は心肺停止によって、壊滅し消失するので、生き返らないです。一略一
2. 人の魂や精神は永遠に残ることがありうると思います。たとえば、偉業を成し遂げた人は後世の人々の中で不滅なものとして生きることがあります。また、自分の愛する人は亡くなくても、ずっと自分の心の中に生きることもあります。よって、「人の魂は一度死んでも生き返る可能性もある」と結論づけられます。

この大学生は、生物学的な「死」と、「人の魂や精神」と呼ぶ「命」は、「永遠に残ることがありうる」と考えているのです。この点は、ハワイに移民して、アメリカ人になった僕の親戚たちも、同様に考えています。ハワイのマウイ島には、城田家のお墓がありまして、2年に1回マウイ島に、世界の城田さんや親族が180人ぐらい集まります。その中には、クリスチャンの人が3分の1位いるのです。その人たちは、本当に死んでも生き返ると思っているのです。死んでしまっても、死後、裁きにあつて、いいことをしている人は、天国で蘇ることができる。悪いことをしている人は地獄にいつてしまう。つまり、神や靈魂の存在を、本当に信じているのです。

養老猛司さん『死の壁』を読んで

『バカの壁』が、400万部を超えるベストセラーとなった養老猛司さんも昆虫少年で、ゾウムシを集められています。養老さんは4歳の時に、お父さんが亡くなられました。そのお父さんとの別れを、次の著書『死の壁』で、克明に記述されています。

「父が亡くなったのは夜中だったので私は寝ぼけていました。臨終の間際に親戚に『お父さんにさようならを言いなさい』と言われました。でも言えませんでした。その後、父は私に微笑んで、喀血して、そして亡くなりました」と。さらに、「私は父が死ぬ直前に、挨拶を促されたがしなかった。父はその直後に亡くなった。私は無意識に、自分はまだ別れの挨拶をしていない、だから父とはお別れをしていない、と思っていたのです。それはつまり、父の死を認めていないということです」と…。養老さんはお父さんの死をずっと引きずっておられたようです。「幼い頃の私は内気な子どもだったようです。近所の人に挨拶ができなかった。挨拶が苦手な子どもでした」とも述べられています。

養老さんは、なぜ、自分が挨拶ができない子どもになってしまったのが、大人になってもわからなかったようです。でも、それは、自分のお父さんが亡くなったことを自分で認めたくなかった。なぜなら、挨拶をしてしまったら、そのお父さんが自分のところからいなくなってしまう。だから、自分は挨拶を拒んできた。「挨拶が苦手なこと、父の死の記憶は直結していた」。それがわかった時に、35歳の養老さんは、地下鉄の中でおいおい泣いたと述べられています。養老さんの結論は、単純で明快です。「死は回復不能です。一度殺した蠅を生き返らせることはできません。だから人を殺してはいけないし、安易に自殺してはいけない。

安楽死をはじめ、死に関することを簡単に考えないほうがよい。僕も同感です。

養老さんのお父さんは、結核で亡くなられました。今では、結核はストレプトマイシンなどの抗生物質で治り、がんと比較してもそれほどたいへんな病気ではなくなりましたが、戦前の日本では、多くの人が結核で亡くなられていたのです。今から65年前の日本人の平均寿命をご存知でしょうか。今から65年前、昭和20年の平均寿命は、なんと男性23歳、女性37歳。当時は「人生25年」と考えられていたそうです。江戸時代の平均寿命でも、60歳に達していたことと比較すると、とてもひどい時代であったことがわかります。理由は明らかです。戦争のために多くの若者が戦場で命を落とし、国内でもたくさんの方が空襲で殺されたからです。また、食べ物も極度に不足していました。生命力の弱い乳幼児の死亡率も高かったからだと思います。戦争ほど、命の尊さを踏みしめる人間の行為はありません。さらに、あまり考察されていないことですが、人間が引き起こした戦争で犠牲になっているのは、人間だけではなく、戦場となったそこに住んでいる、いろいろな昆虫や小さな生き物たちや、焼き尽くされる草花や樹木たちも、その生命を奪われているのです。

父親の「死」

僕の父のことについてお話いたします。若い頃の僕は、父親が「嫌いで、嫌いで」仕方がありませんでした。理由は簡単でした。沖縄では、数え年で13歳（満12歳）になる時に「十三歳祝い」というお祝いをします。自宅の横の畑地で、僕たちはヤギを飼っていました。父親が僕のお祝いに「ヤギを食べる」と言うのです。僕は「絶対に嫌だ！」と拒みました。なぜなら、ヤギは僕の家族だったからです。ビートたけしさんも同じ経験をしたと、『たけしくん、ハイ!』という著作の中で述べられています。ただし、ビートたけしさんたちが食べたのは、ヤギではなくニワトリでした。僕が学校から帰ってくると、ヤギは「肉」になっていました。僕はその時、父親を「殺したくなるほど」憎みました。でも父親はこう言いました。「お前がこのヤギを食べることで、ヤギがお前の体の中の血となり肉となって、お前が死ぬまでずっと一緒に生きていてくれるのだ」と。少年の僕には、父親のその考えが理解できませんでしたし、父親を許すことができませんでした。

その父は、僕が39歳の時に亡くなりました。実は、父親はがんではなかったのに、医師が「胃がん」と誤診しました。医師から僕は、父の胃の全摘手術を勧められました。父が高齢のこともあり、家族は皆、「手術することを反対」しましたが、僕が医師に説得され、家族を説得しました。手術をし、胃を全部摘出しましたが、その手術から3カ月後に父親は亡くなりました。医師は隠蔽しましたが、手術の途中に血圧が24まで下がっていたのです。当時、まだ、大阪市内の中之島にあった、大阪大学の医学部で父親を解剖してもらいました。さらに、生前の細胞も調べ直していただきました。結果は、父はがんではなかったのです。その父を、手術をさせることで、77歳で別の世界に、僕は旅立たせてしまったのです。この十字架を、僕は一生、背負い続けなければならないと思って生きています。

死に対する父の考えは、次のようなものです。「人は必ず死ぬ。死んだ人の魂はすべて天国に行く。しばらく天国でゆっくりした後、またこちらの世界に戻ってきて、いつもお前たちのそばで一緒に暮らしている」。この考えは、父が生まれて育った、沖縄のひとつの代表的な「死生観」です。ハワイで生まれて、現在、ロサンゼルスに住んでいる作家のジョン・シロタが著わした『レイラニのハイビスカス』でも、亡くなった父と母の墓前で、彼らの霊が見守る中で、主人公の「ヤスイチ」が、初恋の人と再会する場面を中心に、劇は進みます。真珠湾攻撃の最中にも、楽観的に生きた僕たちの家族を描いた、『ラッキーカム ハワイ』という小説でも、ジョン・シロタは、沖縄的なものの見方や考え方で、話を進めます。アメリカで生まれて育った彼が、「沖縄の死生観」を持ち続けているのです。

がん研究を始めた理由

進化生物学や行動生態学を専門とする僕が、「りんごの抗腫瘍効果」の研究を40代から始めた理由は、解剖された翌日の僕の夢の中に出てきた父親から、「手術と抗がん剤と放射線治療に代わる方法を考えなさい。それが、残されたお前の人生を賭けてやるべきことだ!」と、告げられたからです。「戻って来るにしても早すぎるな!親父(おやい)」と、夢の中で話していました。

がんの研究を進めている理由は、今一つあります。社会人入学され、学部を飛び級で大学院に進学された小野さんとの出会いと、がんによる別れがあったからです。僕より2歳年下の小野さんは、たばこが大好きでした。苦学して、一生懸命努力して、「国際細胞士」の資格を取られた小野さんは、自分の胃が「がんである」ことを医師から告げられます。胃を全摘手術した後、小野さんは第二の人生として、弘前大学への進学を決意されました。その小野さんの「指導教官」が、僕だったのです。ところが、本当は、僕が小野さんから、いろいろな細胞の染色の仕方や研究方法を習ったのです。僕にとって四十の手習いの、よい先生でした。僕のところで修士を取られた後、他の大学院の博士課程に進学され、学位も取得され、これからというところで、がんが再発し、戻らぬ人となりました。その小野さんとの約束が、免疫力を高めることで、がんを予防する方法を確立することなのです。眠る時間も惜しみ、休日も休まず、相変わらず忙しい生活を続けていますが、父親との約束や、小野さんとの約束を果たすためには、今しばらくは、がんばらなければならないようです。

(以下略)